

開催地名：山口県下関市	
開催日時	令和4年10月29日（土） 9：30 ～ 11：30
開催場所	下関市立勝山公民館
語り部	島田 福男 （宮城県仙台市）
参加者	防災職員、地域住民、防災士 約50名
開催経緯	本市は、山口県西部の本州最西端に位置し、瀬戸内海（周防灘）と日本海（響灘）さらには本州と九州を隔てる関門海峡に面しており、今年、高潮浸水想定区域の見直しも実施されているが、過去を振り返っても大きな被災経験が少ないため、職員及び市民の防災意識の低迷が課題となっている。
内容	<p>（１）はじめに</p> <p>東日本大震災の災害復旧、復興工事もだいぶ進み、特に仙台市では、遅れていた津波の被害を受けた沿岸部も大分整備され、津波避難タワーも設置された。実は東日本大震災の2日前の3月9日11時45分に、マグニチュード7.3の地震(最大震度5弱)が発生しており、3月10日の新聞では、「当面大きな地震の発生する可能性は低くなった」と掲載されていた。しかしながら3月11日にあのような大地震が発生したことで、地震予知の難しさ、いつ起きるかわからない恐ろしさを改めて認識した。</p> <p>（２）仙台市の被害状況</p> <p>2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源とする国内観測史上最大規模のマグニチュード9.0の地震が発生した。最も被害の大きかった東北の3県の内、宮城県で亡くなった方は9,544人、行方不明者は1,213人といずれも最も多かった。犠牲になった方の90パーセントは津波による被害に遭った方である。そして、そのうちの90パーセントは車に乗っていて犠牲になった方である。仙台市は、仙台より南は仙台平野で沿岸部からずっと平坦地が続く。津波はとどまるところを知らず、内陸部5キロメートル地点まで押し寄せた。訓練のときは徒歩で避難するが、いざ地震が起きたら慌てて車で逃げてしまい、犠牲になったと言える。震災後は車で避難する際のルール作りも行われたが、その後数回発生した余震の際も車で避難する住民が後を絶たず、今後の課題となっている。</p> <p>（３）避難所の状況</p> <p>避難所は、体育館はおろか、校庭まで人であふれ身動きの取れない状態であった。原因は、帰宅困難者である。指定避難所だけでなく、公的な施設である県庁、市役所、区役所などに人が押し寄せて、中に入り切れなくなった人が道路まであふれてしまった。そのため、地域住民と企業、自治体三者で話し合いをし、災害が起きた場合は、すぐに帰さないで会社にとどめておくなどの協力を企業に求めた。今は、企業において防災教育も盛んに行われている。</p> <p>発災初期の段階で重要なポイントが2つあった。1つは照明用の器具を町内会に借り、避難所の体育館内を明るくしたことである。おかげでひどい余震に揺れる体育館の中でパニックにならずにすんだ。もう1つは避難者カードを発行したことである。避難所の運営はカードを基に行った。カードは避難者の問合せの際に活用した。また、外出するときは所定の場所</p>

に置き、帰ると戻す。食事のときもカードを基に名前を呼ぶ。カードを発行したことで、整然と避難所運営を行うことができた。

(4) 自主防組織の立ち上げ

私の所属する川平学区連合町内会は5つの町内会で組織されている。地域の人口は約1万人で、規模の大きい連合町内会である。平成19年、川平学区連合町内会自主防災行動計画を策定、防災の取組を始めた。昭和40年代の大規模住宅団地開発により形成された川平地区は急速な高齢化が進んでいた。700万円の予算を使い、防災活動に必要な資機材を購入した。毛布や発電機、投光器、リヤカーなど、一通りの物を用意すると、1つの倉庫で約150万円かかる。震災後はこれでは足りないという意見があり、現在は3つの倉庫に450万円分を備蓄している。この他に、研修会や講習会において、主にHUG（避難所運営ゲーム）、DIG（災害図上訓練）、クロスロード（分かれ道）という3つのカードゲームを行った。平成23年2月には大体の災害対応計画案が完成したので、ワークショップを開いて、地域住民に説明をした。

(5) 震災後の自主防災組織の見直し

仙台市では震災後、地域防災計画を見直した。それまでの防災計画は公助を中心とした、どちらかというと市の職員向けのものであった。しかし、公助では限界があり、市民力、地域力、これを全面に出した自助、共助を生かさないとたない。自助、共助、公助の共同による対策が一番望ましいため、計画を練り直した。当然、避難所運営マニュアルも見直し、193の指定避難所ごとに地域版避難所運営マニュアルを作ることになった。今はそれに従って避難所の運営訓練などを実施している。



開催地より

東日本大震災を経験された語り部から、避難所生活や自主防災組織の立ち上げについて、具体的なお話を聞くことができた。改めて防災活動に対するイメージを強く認識することができたと思う。今後の市内各地域での防災活動に役立てていきたいと思う。